
幼馴染はチビなお前

森林 夏海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染はチビなお前

【Nコード】

N8799Y

【作者名】

森林 夏海

【あらすじ】

チビ、負けず嫌い、生意気――。挙げれば挙げるほどキリがない。そんな印象を持つハルカと七年前に知り合ったユウ。十三の歳になってももめ事が絶えない二人。二人のおかげでクラスは毎日波乱万丈、ハチャメチャ。魔法が存在する王国、聖ノアルス国のトリス学園、中等級クラス八組で今日も何かが起こる――

プロローグ（前書き）

とても短く、乱雑で読みにくい文章ですが、最後までお読みいただければ光栄です。

脱字・誤字等はお見逃してください。

では、どうぞ――

ブローグ

トリス学園入学以来、というと、ちょうど五、六歳の頃だっただろうか。出会ってすぐに仲良くなった……

—— いや、訂正^{ていせい}しよう。そんなすぐに仲良くなったわけがない。なんせ、ハルカは凶暴な小動物、例えるなら発情期の小猿と同等……

「痛っ！」

ユウの顔面に教科書が見事に命中した。それを目の当たりにしたクラスメイトは爆笑。

毎日のように、この教室では、ユウとハルカの乱闘^{らんとう}が繰り広げられていた。一度始まったら誰にも止めることはできない。

ハルカとユウの乱闘はそう珍^{めづ}しいものではなかった。

毎日のようにというと言い過ぎだが、まあ、この学級の名物といってもいい。

乱闘の兆候が見え始めると、生徒の殆どは観戦へとまわる。

なお、この乱闘を、観戦する場合は、流れ弾が飛んでくるかもしれないから盾となるようなものを持参、またはその陰に身を隠すことをお勧めしたい。

「痛ってエな！ 鼻血出たらどうするんだよ！チビ！」

「チビ、チビ、チビうるさい！！ あんた、どれだけ、こつちが深刻に悩んでいるのか知っているの！？」

「さあ、こつちの知ったことじゃ……」と言う間に、ノートが飛んできた。

ユウはそれを避けると走り出した。「待て！」という掛け声と共にハルカは、その逃げる侮辱者を追いかけた。

ユウは教室の窓際、いわゆる掃除用具コーナーにつくと、そこから心強い武器を取り出した。

掃除用具から取り出される武器と比喻される物は、殆どの方がお察しであるう。

幕を槍のように構え、先端を、机たちが作る角を曲がり、走ってくるハルカに向けた。

ハルカはキュキュッと、足音を鳴らして立ち止まると、周囲を見渡した。

はっ、と教卓に上げられていた何かに目をつけると、それを手に取った。

「ちよっ、待った！ それはないって！」

ハルカが手にしたものは、クラスの出席名簿帳であった。

危機感を全く抱かせない見た目であり、その通り軽量であるが、大抵、角には角止めが施されている。実は、この角が凶器なのだ。

この角で頭上にアタックされた暁には思いがけない痛みに思わず声を上げてしまうだろう。

以前にハルカから鉄槌を打込まれたユウにとっては最悪の武器で

あつた。

さて、心のコンディションを考慮（こうりょ）すると、この状況はユウにとつては元の木阿弥（もくあみ）である。

ユウの額からは少しの冷や汗。教室には、長い戦いに、いよいよ決着（たつよ）というような変な緊迫感が漂う。

沈黙を断ち切ったのはユウの足だった。ハルカの目の前で箒（ほうき）を両手で掲げ一刀両断！ という理想は一瞬で崩れた。

掲げた瞬間にハルカが目の前から消えた、と思った瞬間、ゴンツ。頭上からの衝撃の波が一気に伝わり、目の前が二、三秒くらぐらした。

背後からの何かいるようなの気配と、後頭部近くの痛みから全ては氷解（ひようかい）した。

「痛つてえ……！」

木の棒が床に落ちる音が響いた。頭を抱えるユウを見て、ハルカは勝負あったといった顔つきをした。

「これで少しは懲りた？」

「痛つてえな！ 空間移動なんて卑怯ひきょうだろ！」

そう、あの時ハルカは空間移動術を使用していた。

「卑怯ひきょうつて何よ！ 大体、そっちから喧嘩かを吹っ掛けてきたんでしょ！」

感情が高ぶったユウは、ハルカの言うことにお構かまいなし。

「正々堂々せいせいどうどう正面から立ち向かって来いよ！ 魔術なんか使いやがって！」

二人の間に、仲介ちゅうかいを装よそおったリュウが入る。

「まあ、まあ。ここは神聖な審判たる僕がジャッジしよう」

こういった喧嘩では、大抵周りを盛り上げる司会的役をする奴がいる。それがリュウだった。

どこか抜けたような感じ、良く言えば穏和おんわな雰囲気おんわの少年だ。

「僕が審判するに、今回の試合は」

いつもなら彼の仲介で少しは二人の熱も冷めるのだが、今回は違った。

熱度ねんどが極端に上がった二人には彼の声は届かなかった。

「あー！ うるさい！ あんたはすっこんでて！」

「お前来るとややこしくなる！」

二人の拳の入った声と互いの両手で、リュウは呆気なく突き飛ばされた。一瞬志は共になったものの、またすぐにいがみ合った。

倒れた哀れな仲介者に二人くらいの生徒が駆け寄り、その肩を持つて、殺気立ったその場からすぐに退場した。

「大体、お前だって俺の悪口言うじゃねえか！」

「例えば？」

「例えば……。ん？ そうだな……。」「
凶星だった。」

「こっちはね、真剣に悩んでんの！」

「小っちゃいことを？」

「また言ったあ!!」

いよいよ取っ組み合いが始まるうとしていた。

教室が再びざわめき始めた。

——
が、それはすぐに静寂と化した。

取っ組み合いの態勢に入り、睨み合う二人の頭を大きい掌が力強く掴み、ぐいと横に曲げた。

「お前ら、一体何しているんだ？」

掌^{てのひら}が導いた先には、目の鋭い^{すみじ}、恐ろしい担任の顔があつた。

頬^{ほお}に傷の縫い跡^{ぬあと}があり、サングラスをかけると、なお一層^{いっそう}恐さを増すような顔なのに、虫の居所^{いどころ}が悪い時のその恐ろしさは例えられたものじゃかった。

「おいこら、お前エら。軽く教室が暴れ馬が去つた後のような事になつてんだけど……」

ユウとハルカの熱は一気に冷めた。担任の静かな態度が異様な恐怖を抱かせた。まず、ピアスをしている時点で普通の教師とはとても思えない――

「まあ、理由はともかくだ」

二人は散々^{さんざん}注意の声を浴びせられ、挙句^{あげく}の果てには両手に水入りバケツを持たされ、廊下^{ろうか}に放り出された。馴染がないようであるお決まりのこのパターン。

放り出された二人にはお構い^{かま}なしに、授業開始の鐘は鳴る――

プロローグ（後書き）

いかがでしたでしょうか。

少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

頑張ってこれからボチボチ更新する予定です。その時、またお読みになっていただけたら嬉しいです。では。

第一話 千載一遇の朝

トリス学園入学以来、というと、ちょうど五、六歳の頃だっただろうか。トリス学園は、この聖ノアルス王国における名門トップスリーに入る高成績学園だ。

ユウは、何故ここに入学できたのかは、今でも、よく分かっていなかった。

特別、幼少時に勉強していたわけでもなく、魔力だってそんな強力なものではないし――

思い当たる節は全くなかった。

名門とまで呼ばれるこの学園に入学してしまったお陰で成績は不調。下から数えたほうが断然早い。

正直、この七年間は自由に過ごしすぎたと言ってもいいくらい、とことん遊んだ。

“遊べる時に遊んでおいたほうが絶対得！”

これがユウの信条だった。信条と言ったら言い過ぎかもしれないが。

楽しい時はより楽しく。辛い時を楽しく。
そんなのがユウだった。

ハルカとは初等級（トリス学園における五、十の歳の子供たちの学年単位）で知り合った。

＊

「何でお前と一緒に立たせられるんだよ」

ユウは不平を鳴らし、ハルカはため息をついた。

「それはこっちの台詞。せりふ　ユウが素直に謝れば良かったのよ」

勢いよく扉が横に開く音に二人は竦んだ。

「おい。お前ら、少しは反省したか」
教室の扉から恐い顔が覗いていた。のぞ二人はコクコクと頷いた。うなず

「ったく。おら、とつとつそのバケツその場に置いて中に入れ」
担任のその声を聞くと、二人はすぐにバケツを置き、教室の後ろ
扉から速やかかつ静かに入った。すみ

授業を終えると、ユウの周りには男子が、ハルカの周りには女子
が集まった。

性別は違えど、話の内容はほぼ同じ。

「まさか先生が来るとは思わなかったな」

「ホント。鐘^{かね}の前^{まえ}に来るなんて珍しいよな」

クラスの少年たちが口々に言う。

リュウがユウの肩に手を置いた。

「まっ！　そういう時もあるって」

「お前の仲介は今回役に立たなかったな」と一人の男子が言うと、リュウは「まあ、まあ。それを言っちゃ、こっちの立場がないって」と笑みを浮かべた。

「おい！ 皆！」

一人の生徒が、勢いよく教室に飛び込んできた。

「今日午前放課だつてよ！」

その一言が、教室の活気の導火線に火をつけた。

言葉になっているようになっ
ていない男子の声が一斉いっせいに教室を満
たした。

手を取り合つて飛び跳ねる。

女子も男子ほどは激しいものではないが歡喜かんきした。

突然の、この学園では千載一遇（せんざいいちぐう）（言い過ぎかもしれない）の機会に、今にも胴上げが起こりそうなの賑わい。

もはやお祭状態。

こうなればもう性別の隔（へだ）たりも関係ない。

さっきまでの喧嘩（けんか）のことも忘れる二人。

ハル力はすぐにユウの傍（そば）に駆け寄ってきた。

「ねえ、ユウ。午後暇？」

「ああ。暇（ひま）だけど――」

「じゃあさ、またあれやろうよ。こっちも人数集めておくからさ」

それを耳にしたタクが得意気な顔をして話に飛び込んできた。

「よっしゃ。この前の決着をつけるか」

「前は引き分けだったが、今回は勝負ありにさせてもらっぜ」と
ユウ。

そこに勝気のシュカがハルカの隣で対抗の声をあげる。

「こっちだって本気でやらしてもらっから。覚悟しなよ男子共!」

両者の変な闘志は教室に伝播した。

「ユウ軍とハル軍の缶蹴り戦争が開催されるらしいぞ！」と一人の男子が賑わいの中で叫ぶ。

それを聞いた少年少女は「やる！」と次々に参加志願を叫んだ。

ここにまた争いの種が撒かれた。

どうやらユウとハルを中心とした対立はクラスをも巻き込むらしい。

二人の譲れない勝負意識をどうか温かい目で見守ってほしい。

ところで、缶蹴りはご存じだろうか？

一人、鬼を決め、その鬼が、特定の場所に配置された缶を、逃げ隠れる参加者から蹴られぬように守りつつ、その逃亡者を見つけるという遊びである。

では、缶蹴り戦争はご存じだろうか？ 缶蹴り戦争とは、缶蹴りに新たなルールを付加したものである。
鬼と逃亡者は互いに魔術の使用が許可される。

大怪我したらどうするのか、ですって？

ご心配なく。

この国では身分階層が存在し、ある程度の職に就かない限りは具コンクリートンクリート体魔術は学ぶ事はないのだ。

具コンクリートンクリート体魔術とは、抽象魔術を具現化ぐげんかさせたものである。と言って分かる人はおそらく、いないだろう。

抽象魔術とは、言うならば「幻まぼろし」である。

例えば、今から炎の魔術、火の玉を放つような想像をしてみてください。

掌の上に火球かきゅうを創つくり、それを放つ。そんな想像をしてみてください。

どうでしょう？ 自分は火球かきゅうを放ったはずなのに、現実には何も起こってはいないでしょう。

先程さきほど、あなたが放った火球は、あなたにしか見えていません。つまり、あなたが放った火球は、あなたにしか見えない想像なのです。

しかし、抽象魔術アブストラクトの場合、その想像は他人にも認識にんしきできます。簡単に言うと、先程さきほどの火球は他の人にも見えるということです。

これが抽象魔術アブストラクト。被害を出すことはまず無いのです。

具コ体ンク魔リ術ーは、アブストラクト抽象魔術とは違い、ファンタジー幻ではない。

さっきの例でいうと、コ具ンク体リ魔ー術の場合、あなたが作り出した火の玉は本物であり、モウロウ勿論、コ放ンクった先では火の手があがります。

ノアルス国の教育機関では、アブストラクト基本的に抽象魔術の授業が展開されるが、トキオリ時折、コ初ンク級の具リ体ー魔術が一部取り上げられることがある。

以前にハルカが使った空間移動術は、それに当たる。

魔術を使用できるほかに、体力制のルールが適用される。

十の歳になると空間創造術くわんそうじゆつを学ぶ。空間創造術とは、文字通り、新たに空間を作り出す魔術だ。子供の殆どほとんどは、この術で遊び場を創り出し、そこで遊ぶ。

空間内では簡単なルールを取り入れることができる。

例えば、“大人は立ち入り禁止”というルールを設けたとしよう。そうすると、大人はその空間に立ち入ることはできない。

この空間創造術は学校でよく教師が使用する。“私語をするな”

というのは有名なそのルールの一つだ。

最後に、空間が崩壊することはあるのか？ という疑問を持った方がいるかもしれないが、空間創造術は抽象魔術である。

簡単にいうと、空間創造術で創られた空間は想像であるため、崩壊したら現実に戻るだけなのだ。

体力制における体力は、自身の魔力に相当し、攻撃系統の抽象魔術（例えば、火炎系の魔術―幻だから怪我はしない）を受けることで減少する。

缶蹴り戦争のルールは単純で、鬼は逃亡者を全員捕まえたら（逃亡者がいなくなったら）、逃亡者は缶を蹴ったら勝利となる。

逃亡者は捕まった場合、空間退場（創った遊び場の空間から追い出される）となり、強制的に空間の外に追い出される。また、体力が無くなった場合は、鬼に捕まった場合と同じ扱いになり、空間退場となる。

鬼は体力がなくなった場合のみ退場となる。

缶蹴り戦争のルールを一言でまとめると、『魔術で相手の体力を減らして倒せ!』ということだ。

＊

「じゃあ、放課後、校庭に集合な」

次の授業の鐘が鳴ると、急いで皆は席に着いた。

騒いでいるところにまた、担任が来たら—— という予想が、もう皆ついていた。

しかし、今回、担任大量の紙を手にとって、遅れて教室に入ってきた。教卓に立つと、ひとつ大きなため息。

「えー……と。お前らも聞いているかしんねエが、突然だが、今日は午前放課だ」

殆どの生徒は、そんなことはもう知っているから早く帰せ。と思ひながら聞いていた。

「先生。その紙ってなんですか？」とタクが手を挙げた。

「これか？ さあーで、何でしょう」

「まさか……宿題？」

先頭の席にいたエミが不安そうに尋ねる。

それを聞いた担任はニヤリとした。

「はい、エミちゃん正解！」

えー！ という生徒たちの不満の声が一斉に漏れた。

ユウたちは、さっきまでの気合が一気に抜けたような気がした。

第一話 千載一遇の朝（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます！

また、前話をお読みになってくださった皆様、本当にありがとうございます！

今回も色々読みにくい文章ですいませんm m

誤字・脱字等がありましたら、指摘していただけると幸いです。

またの機会がございましたら、よろしく願います。では。

第二話 少年たちの集い

「ついてねエよなあ」

まだ燦々^{さんさん}と坂を照らす陽^ひを見ると、とても放課後とは思えなかった。真昼間^{まっぴるま}に下校するというのは、今日が何か特別な日という感じにさせる。はずだった。

タクは、ちえつ、と声を漏^もらしながら小石を蹴^けとばした。

「まさか、あんなに出るとは思わなかったね」とリュウ。

「あの先生、顔は真面目じゃないくせして、宿題とか提出物とかになると厳しいんだよな。どうする、ユウ？ あの量だと一日かけねエと終わらないと思うぜ」

ユウはガムをくちやくちやくと噛むのに夢中になっていたのか、一

瞬返事が遅れた。

「いいんじゃないね。遊ぶ約束のほうが先だったし」

「女の子たちはどうするのかな」

「多分終わらせてから来るだろう。女子はやるのが早いから」

蝉の鳴き声が重なり、炎天下で独特の歌を奏でていた。

「宿題とかパパッと終わる魔術とかねエんかなあ」

ユウが独り言のように呟くと、「あつたら便利だね」とリュウが相槌を打った。

タクはいかにも高そうな銀の腕時計を見た。

「確か集合が二時頃だったから……まだ余裕があるな」

巨大な綿菓子わたがしのような雲が遠い南の空に浮かぶ青空を見上げていたユウは、ハツとした。

「そうだ！ “帝”テイたちにも応援を頼んで男子で作戦会議を開こうぜ！ 宿題は夜に寮りょうに集まってやろうぜ。」

タクとリュウは頷うなずいた。

「そうだな。宿題におけるミスはいつでも拭ぬぐい去れるが、あいつらに負けたという汚名は一生もんだからな」

「意義^{いぎに}二同じ！」

意見はすぐに一致した。

「じゃあ、寮^{しやう}に荷物置いたらいつもの場所に集合な！」

＊

ユウを中心とする八組男子は、レグウィンジ公園という学園管轄^{かんかつ}の広場^{ひろば}に集^{つど}った。

夏の昼の日差しは辛いものがある。総勢十八名は、中央にそびえる巨木^{きよぼく}の下で作戦^{さくせん}を練^ねった。

「前は確か、ユウとリュウの挟み撃ち作戦だったよな」

話を切り出したのは、やはり、タクだった。

ユウはその場に座り、胡坐をかいた。

「ああ、けど結局シユカとチビのコラボでやられたけどな」

一人の小太りの少年、ブンタが、透明で綺麗な紅い飴を頬張りながら言った。

「空間移動系の術はキツイよな」

「確かに、先回はそれで殆どやられたもんな。まあ、アルの足おかげで敗北を免れたのは幸いだった」

「いや、あれは俺一人できたことじゃない。タクの考えがなければ、あれは成し遂げられなかった」

アルは照れを見せることもなく、冷静さを保っていた。

ユウは腕を組んだ。

「まずはチビとシユカをどうにかしねエとな」

「“帝”たちが来るって聞いたけど、それが本当なら万々歳だぜ。先回の結果の要因は、帝たちが試合で来れなかったこともある」

「だけどさ……」

ガヤガヤ……。

“帝”^{テイ}は入学以来、陸上競技部に入部し、その成績から早くにして部長となった。勉強面に関しても中等級三位^{ちゅうけいさんい}という高い成績を修めている。

本名はアサキ＝テイ。

どこかしら帝王のような雰囲気^{ふんいき}を持っている為「帝」^{テイ}と呼ばれている（おそらく性格からではないと思うが）。

そんな帝であるが、ユウと同様、遊びの事になると根っから熱中してしまつ性格だった。先回の缶蹴り戦争では、試合の決勝であつたため、参戦しようにもできなかった。

今回も本当ならば、部活で来れないはずだったのだが、教師は午後から緊急の会議が行われることになったので、監督不在の状況になり、ユウの連絡を聞き、帝は監督がいらないことをいいことに、副部長に「今日は負けられない戦いがある」などと意味不明な口実（くじつ）を告げ、後を押し付けてこちらに向かつていた。

帝には通称『帝組^{テイ}』という、よくつるんでいる強者メンバー^{つわもの}がいる。聞いてみれば、そのメンバーも参戦するというのだから心強い。

ユウの中には敗北の不安どころか、勝利の余裕さえあつた。

第二話 少年たちの集い（後書き）

第二話完成しました。最後まで読んでくださった方々有難うございます！

今回は結構短い話となっていました。分かりづらい表現があったりして、嫌だなと思ったりしたら感想フォームにてお伝えください。また、誤字・脱字等がありましたら、これも感想フォームなどから伝えていただければ有難いです。

引き続きこれからも宜しくお願い致しますmm では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8799y/>

幼馴染はチビなお前

2011年12月6日10時48分発行